

嬉野温泉駅周辺景観ガイドライン

目次

序章 はじめに

1. ガイドラインの目的・背景 4
2. ガイドラインの対象範囲 4

第2章 基本方針

1. 嬉野の魅力 6
2. まちのコンセプト 7
3. まちの全体設計について 7
4. まちの基本方針について 9

第3章 駅周辺計画

1. 計画の骨子 15
2. 駅周辺計画について 16
3. 官民連携事業の概要 20
 - ① 駅周辺まちづくりの役割 20
 - ② 導入機能の検討 21
 - ③ 土地利用方針 26
- (参考) 市長へのヒアリング 27

第4章 整備のルール

1. 景観・機能に関するルール 34
 - ① 癒しを感じさせるためのルール 34
 - ② 伝統文化を活かすためのルール 35
 - ③ 自然で安らぐためのルール 36
2. 建物に関するルール 37

※ 用語解説 40

序章 はじめに

1. ガイドラインの目的・背景
2. ガイドラインの対象範囲

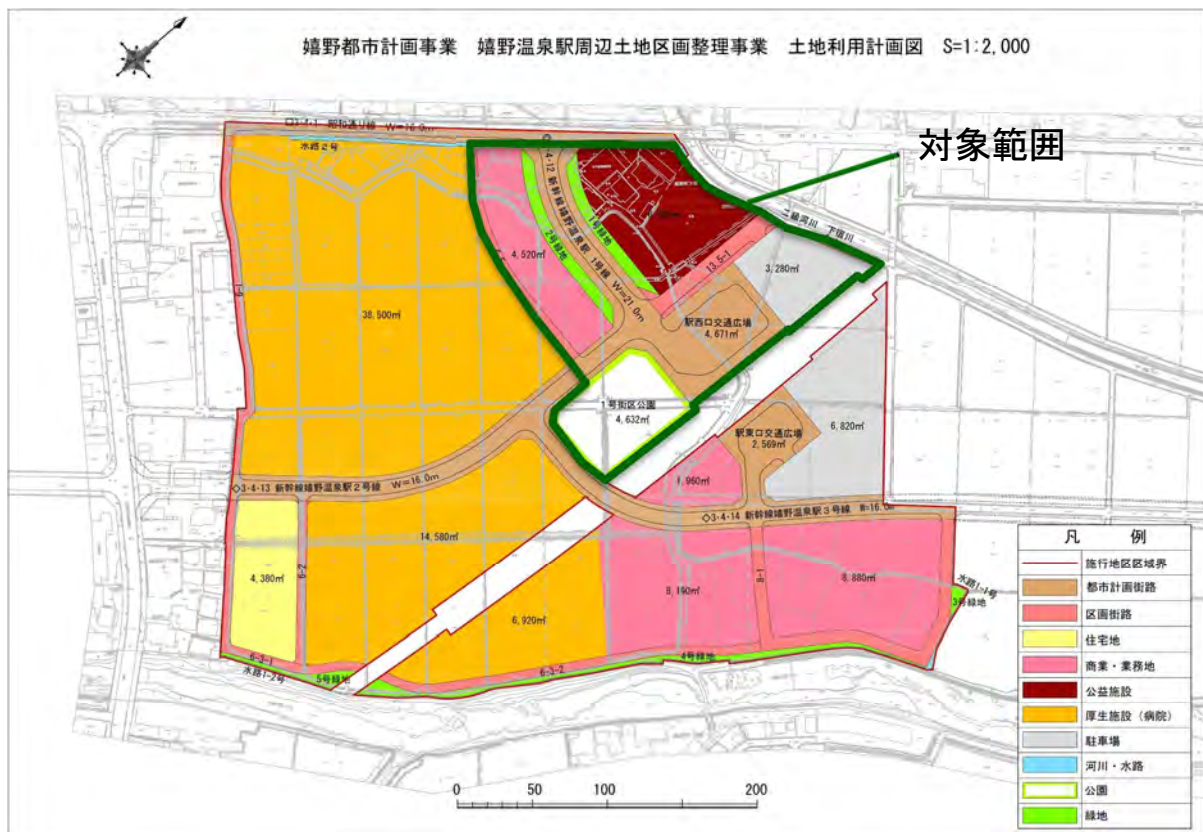
1. ガイドラインの目的・背景

嬉野温泉(仮)駅の開業に伴う駅周辺まちづくりは、嬉野の歴史や文化を踏まえ先人たちの息吹を受け継ぎ、嬉野のさらなる発展に大きく寄与するものでなくてはならない。そのためには、まち全体を包括的に俯瞰しながら、その中で最初の玄関口となる駅前の姿を形作っていくことが必要となる。形骸化せず内外から人が集う嬉野らしい魅力的な駅前。それは行政だけで作られるものではなく、民間事業者と行政とが連携し共通のビジョンのもとに、共に作り上げていかねばならない。また、新市長にもヒアリングを行い、将来目指すべき駅周辺の姿を求めた。本ガイドラインは上記の観点から、駅前周辺整備にあたって民間事業者と行政が守るべきルールを整理するものである。



2. ガイドラインの対象範囲

駅周辺では土地区画整理事業が行われている。このうち、民間事業者と行政の連携による事業が予定されている西口をガイドラインの対象範囲とする。



第2章 基本方針

1. 嬉野の魅力
2. まちのコンセプト
3. まちの全体設計について
4. まちの基本方針について

1. 嬉野の魅力

嬉野は奈良時代に編纂された肥前風土記にもその名が見られるほど古くから温泉地として栄えており、江戸時代には長崎街道の宿場町として多くの往来があった。他にも全国的に高い評価を得ている嬉野茶、永い伝統を持つ肥前吉田焼などの伝統的な名産品も多い。また、温泉湯豆腐や日本酒などの食文化も栄え、周りには豊かな自然環境も整っている。このように嬉野は多くの観光コンテンツを持っており、観光地としてさらなる発展が期待できる魅力を持っている。



温泉



うれしの茶



肥前吉田焼



茶畑



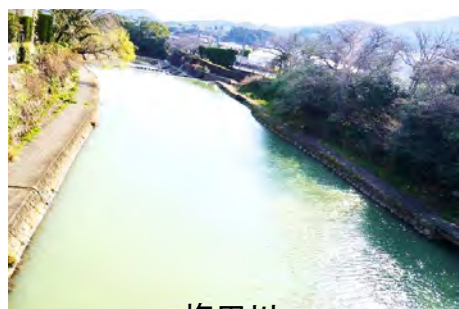
温泉湯豆腐



轟の滝



地酒



塩田川

2. まちのコンセプト

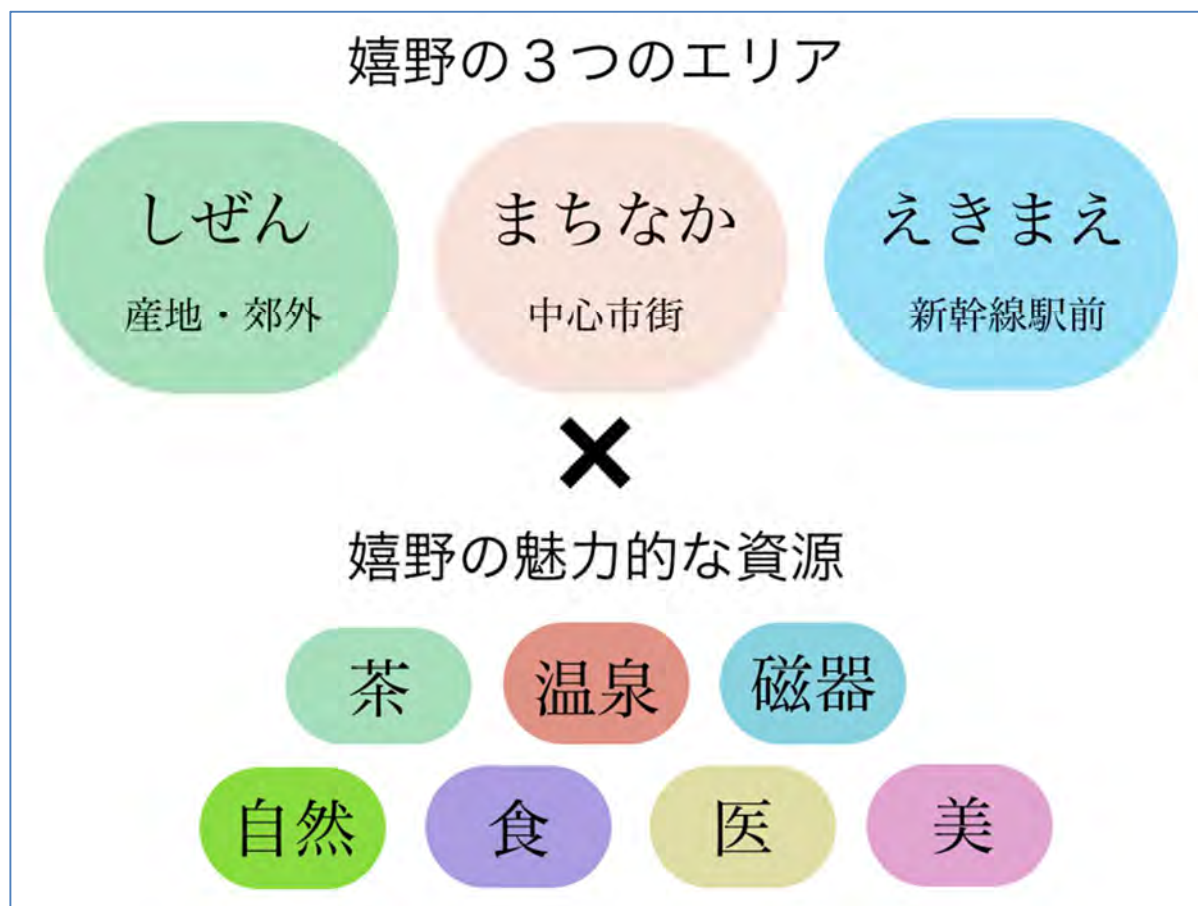
前述した嬉野の様々な魅力を包括的に捉え、嬉野のまちづくりの根幹を表現するにあたり以下のコンセプトワードを設定した。

いやしの うれしの

駅前周辺整備はあくまで嬉野のまちの全体像を見据えながら行われなければならない。「温泉」「お茶」「焼き物」という嬉野を代表するコンテンツを筆頭に「自然」「食」「医」「美」など嬉野には多くの魅力があるが、その全てに共通する根幹となるのが「癒やし」である。その大枠の中で、駅前とまちなかは分断されずに一つの大きなビジョンで結ばれることが観光地である嬉野にとって望ましい。

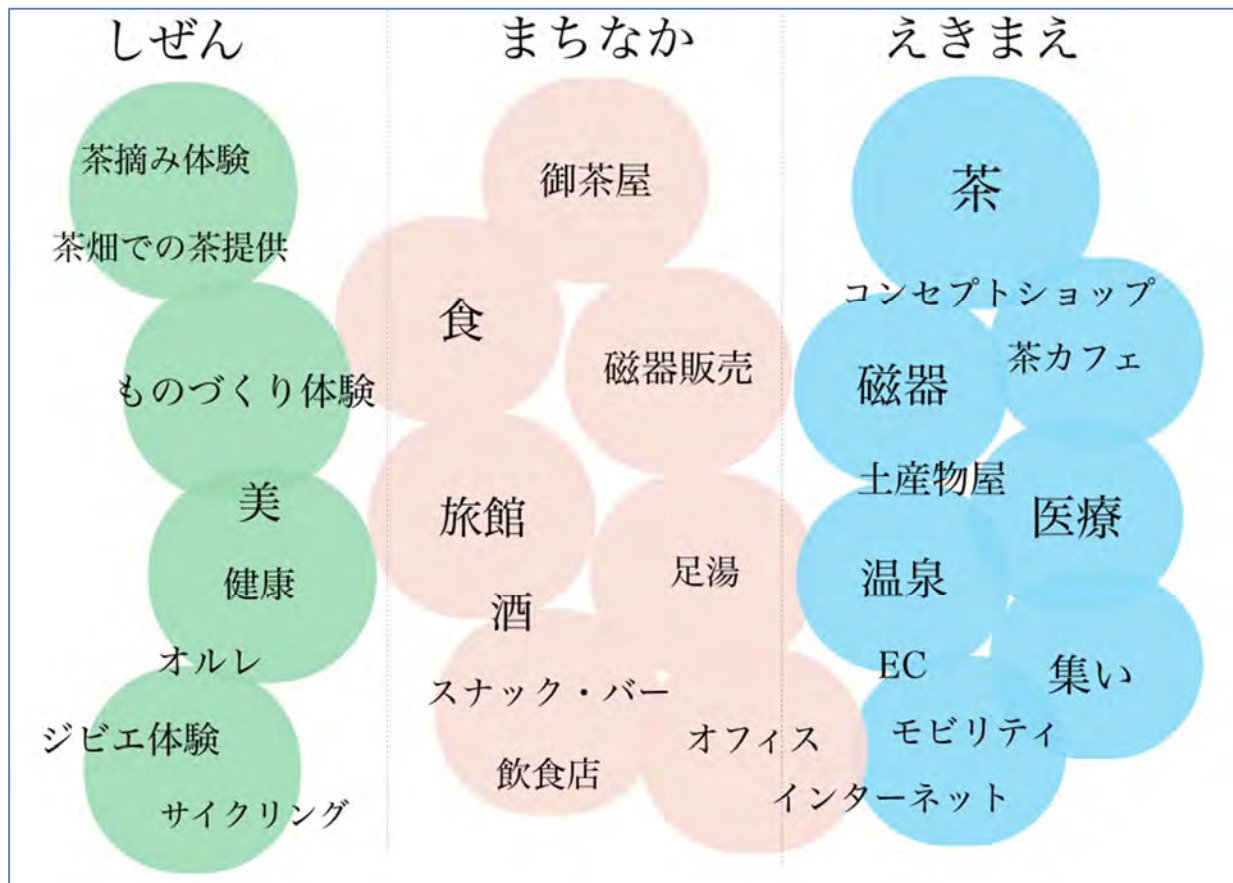
3. まちの全体設計について

以下のイメージ図は、まち全体を大きな観点で見つめそれぞれのゾーンでの役割を可視化し、それに嬉野の魅力的な資源を組み合わせたものである。



新駅が整備されると、これまでまちなかに点在していた様々な魅力が、大きく「駅前」「まちなか」「自然豊かな場所」とより大きなゾーニングのもと、様々な形で展開することができるようになる。

以下の図はその詳細を、さらにイメージ化したものである。



駅前には嬉野の伝統的な魅力である「お茶」「温泉」「磁器」をベースに、市民や観光客が気軽に寄れるカフェやコンセプトショップ、モビリティやインターネット、サイネージ、そして嬉野の自然を感じる場をつくる。

また、まちなかは今の魅力（コンテンツ）をそのままに、さらにこれから増えるであろうインバウンド客も満足できるようなサービスや新業態を生める場所に進化することが望まれる。

そして、これまであまり有効活用されていなかった豊かな自然に焦点を当てることによって、もっと嬉野の価値を増大させる。「茶畑」「温泉」「磁器」「川」「森」などは、この土地が与えてくれた大きな恵みであり、それをさらにコンテンツ化していき訪れる人や市民が豊かな体験を得られるように整備する必要がある。

上記をふまえ、以下にそれらを網羅した概念図を記していく。

4. まちの基本方針について

駅前まちづくりを契機とした嬉野全体の魅力づくりの方向性をまとめたものを三幕の絵巻物の形で表している。時流に流されず嬉野の魅力の本質をベースに設計するために、敢えてそのスタイルに落とし込んだ。

いやしのうれしの 絵巻



コンセプトイメージ図：第一幕 癒しの嬉望 始まりの図

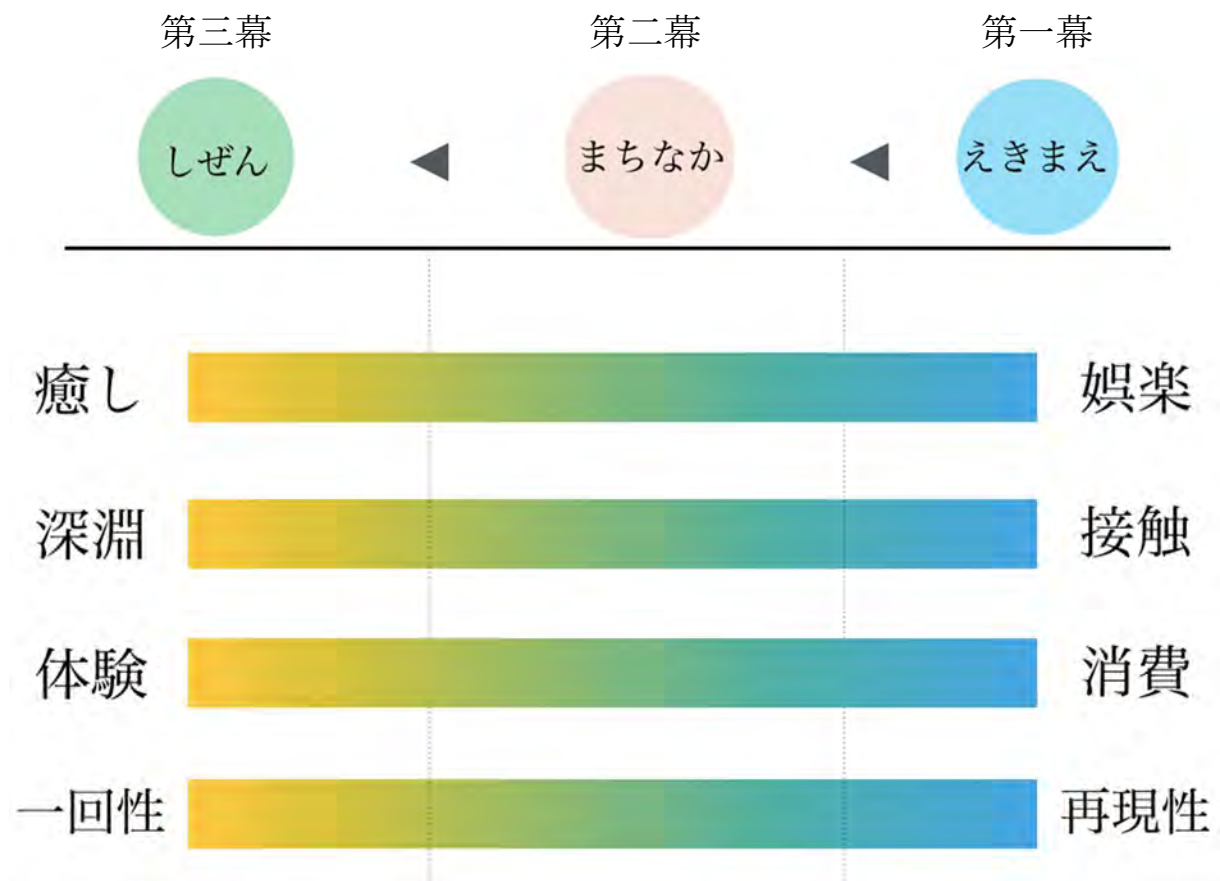


コンセプトイメージ図：第二幕 癒しの嬉望 温泉街の図



コンセプトイメージ図：第三幕 お茶と陶芸 体験の図

一幕から第三幕までが一枚の絵巻として連なり、全体コンセプトを網羅する。「駅前」から「まちなか」、「自然」までの導線を川がベースとなり描かれている。また、「駅前」から「自然」に向かって行く導線に関しては、以下の概念も盛り込まれている。



駅前においては、初めて訪れる人により多くの情報やイメージに触れてもらうことが重要である。嬉野のイメージに最初に触れる場所であり、市民が集い、そこに訪れる人たちは駅前で嬉野の伝統や文化、人や自然を体感することができる。駅前で嬉野の「風情」や「魅力」に触れたのち、より深い体験や娯楽、癒しを求めて「まちなか」や「自然」に移動していく。

以下、各幕に関して注釈を加えていく。

コンセプトイメージ図：第二幕 癒しの嬉野 温泉街の図



第二幕では、通りと温泉街をベースに嬉野の魅力がさらに花開くように描いている。嬉野が伝統的に持つ「情緒」や「風情」、「人情」などが礎となり、「温泉」「川」「遊び」「橋」「色気」「安らぎ」「店」「美」「くつろぎ」「観光」「出会い」などが、シーボルトの湯や足湯施設を中心に、渾然一体となっている。

さらに未来を見据え、嬉野の魅力の基盤上に先進的なモビリティや働く空間なども描いている。魅力的な店も多く観光客の散策にも適し、市民や訪れる人にとって便利で快適な移動モビリティも重要となってくる。

嬉野は他の郊外都市と一線を画し、川や温泉を活かしたこれまでの伝統と、今後増えるであろうインバウンド客をはじめとする様々な人々を受け入れやすい先進設計とが調和する姿を目指さなければならない。

コンセプトイメージ図：第三幕 お茶と陶芸 体験の図



第三幕では、今後大きな可能性を含んでいる嬉野の自然資産を中心に描いた。世界的な流れとして、観光はニューツーリズムとも言われる「体験型観光」にシフトしている。フォーマット化された観光コンテンツではなく、その土地が持つ独自の魅力を体感することが求められていく。「お茶」や「磁器」などの嬉野が持つ魅力を、自然の中でさらに増幅させていくことも、これからの嬉野にとってとても重要である。

「茶畑」「山」「森」「川」「窯」「岩」など、市民にとっては何気ない日常の風景も、訪れる人々にとっては大きな宝に見えることもある。嬉野が持つ資源にもう一度目を向け、日本・世界に誇る魅力の発信源の一つにしなければならない。

第3章 駅周辺計画

1. 計画の骨子
2. 駅周辺計画について
3. 官民連携事業の概要
 - ① 駅周辺まちづくりの役割
 - ② 導入機能の検討
 - ③ 土地利用方針
4. 市長のヒアリングに基づく提言

1. 計画の骨子

嬉野温泉(仮)駅の周辺計画の基本的な方針として、以下の4点を挙げる。

癒し

温泉に代表される安らぎやくつろぎ、情緒や風情といった嬉野らしさを感じさせる景観をつくる

文化

嬉野の伝統文化である「温泉」「お茶」「磁器」など文化の継承と未来を喚起させる景観をつくる

自然

都会的・画一的な人工物を極力排除し嬉野らしい豊かな自然を感じられる景観をつくる

先進

嬉野らしい風情を有しながらインターネットや先進モビリティデジタルサイネージなど先進的なサービスも取り入れる



以上の4点を基本的な指針とし、以下に補完的な詳細を記す。

○全体を統一的に整備

新たにつくりあげるまち全体で集客力を高めるために、嬉野の新しい観光拠点としてのイメージづくりを徹底して行うことを目指すものとし、医療センターに隣接する民有地も含めて全体を統一的に整備する。

○癒しの杜をイメージ

森の中に各種施設をちりばめるような配置とすることで、自然に恵まれた親しみや

すい景観を形成するとともに、中小事業者でも出店しやすい規模とする。

○広場を環状につなげた回遊動線

地区全体を回遊しながらゆったりと楽しめるように、立ち止まって休めるような広場を点在させ、これらを通路で環状につなげる。

○利用しやすい公共交通と駐車場

公共交通機関は駅に近い位置に設け、駅とまちなかをスムーズにつなぐ。待機スペースからは駅前の豊かな緑が見えるような配置とし、快適な旅を演出する。

駐車場は外周部に配置し、歩行者の回遊動線と分離しつつ、各施設にアクセスしやすくする。

2. 駅周辺計画について

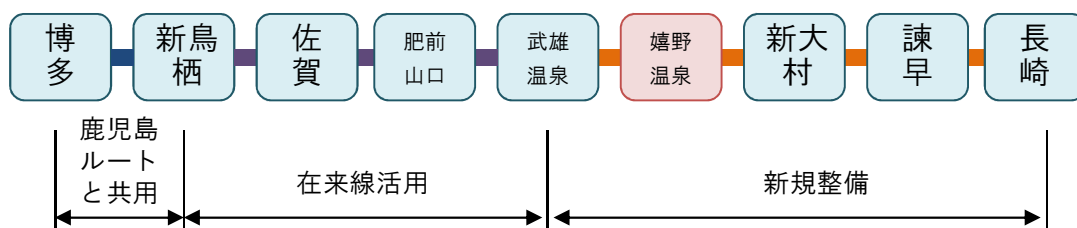
嬉野温泉(仮)駅は2022年度に開業予定となっている。以下は駅に乗り入れる新幹線の現状の基本想定。

○新幹線西九州ルートの開通により、博多～長崎間が最速約80分で結ばれ、現在の特急かもめより約28分短縮となる。

○武雄温泉～長崎間は2022年度開通予定である。

○嬉野温泉(仮)駅には新幹線の半数程度が停車し、1時間に上下各1本程度となる見込みである。

○嬉野温泉駅周辺整備基本計画によれば、嬉野温泉(仮)駅の乗降客数は2,100人/日と想定されている。



嬉野医療センターは県南西部の広域拠点医療機関に位置づけられ、424床、26の診療科の他、地域医療連携、総合リハビリテーション、研修機能を有する。

○計画概要

- ・ 病床数 424 床
- ・ 診療科 26 診療科
- ・ 建物規模

	病院本棟	看護学校	学生寮・研修施設	保育所
敷地面積	約 38,500 m ²	約 14,580 m ²		
延床面積	約 38,150 m ²	約 2,200 m ²	約 2,990 m ²	約 465 m ²
階数	地上 8 階 塔屋 2 階	地上 2 階	地上 5 階	地上 1 階
駐車台数	外来患者用 285 台 職員用駐車場 535 台			

・ 主な機能

救急医療
2次3次医療への対応の充実

- ・ 救急外来の整備
- ・ 救命救急センターの整備 (救命 12床、集中治療12床)
- ・ 屋上ヘリポートとの直結

感染症医療
第2種感染症指定医療機関としての機能強化

- ・ 感染症病棟の整備
- ・ 感染症病棟への専用エレベータを整備

高度・専門医療
がん、脳卒中、心筋梗塞などの高度医療の充実

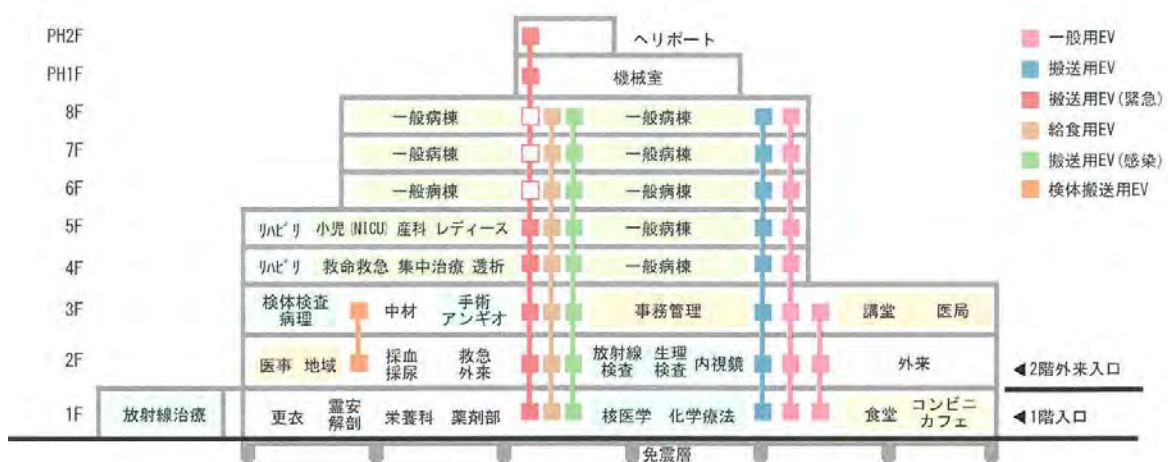
- ・ 放射線治療の拡充
- ・ 外来化学療法センターの整備
- ・ ハイブリッド手術室の整備

災害医療
地域災害拠点病院として、大規模災害時における医療の継続提供

- ・ 災害センターの整備
- ・ 病院の地震対策 (免震構造)
- ・ 非常用インフラの整備

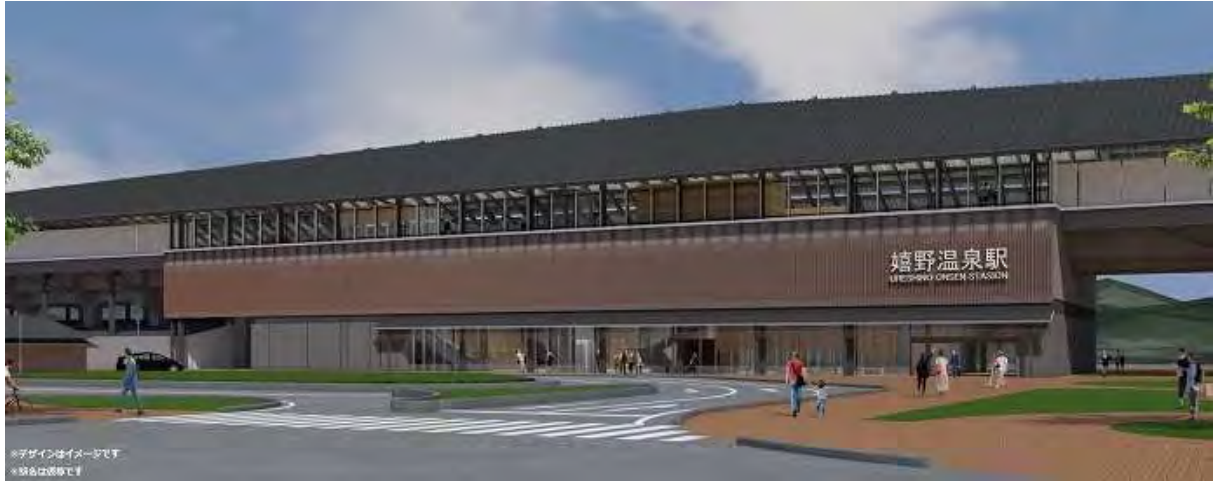
小児・周産期医療
2次小児救急、2次産科救急 (ハイリスク分娩) の充実

- ・ NICU 3床の整備
- ・ GCU 3床の整備



駅舎においてはすでにデザインが決定しており、以下のとおりになっている。

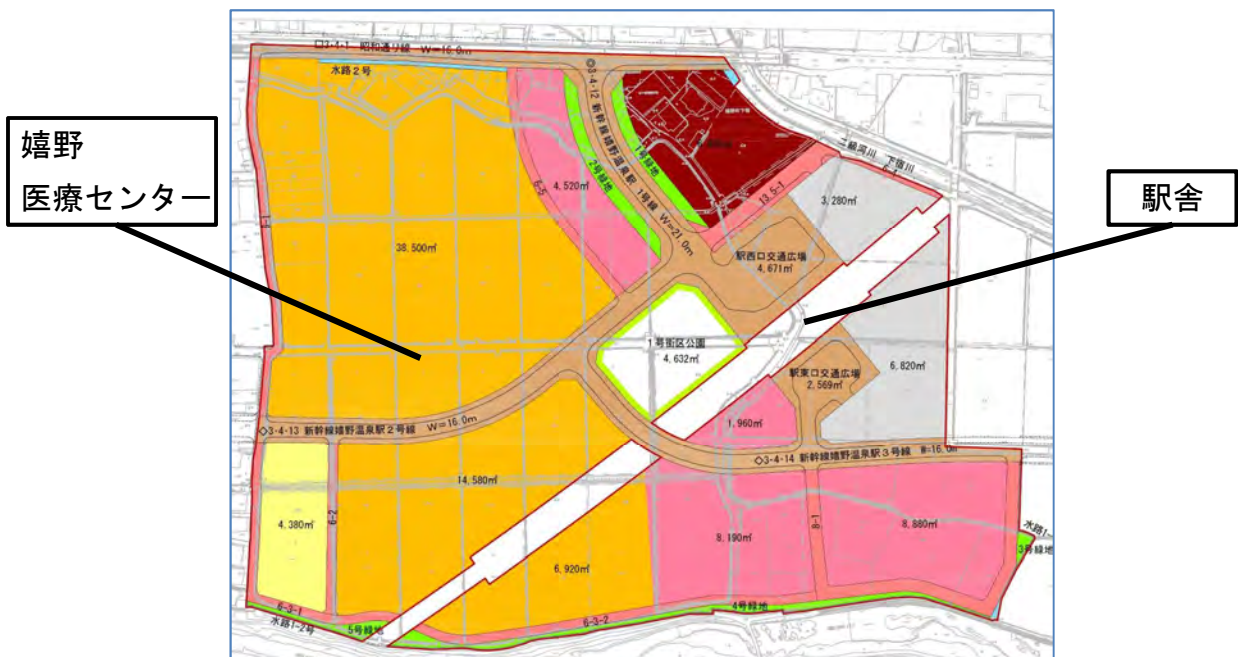
嬉野温泉（仮称）駅舎デザイン嬉野市推薦案「湯どころの趣のある駅」



コンセプトは以下となっている。

- 嬉野の山並みをイメージした屋根
- 歴史ある嬉野の湯宿の持つ和の装いを
洗練された和の構成で表現したファサード
- 焼き物を細かい縦格子として使い温泉宿の趣を表現
- 奥行きのある異なる材料により陰影を出し深みのある表情

各施設の位置図



3. 官民連携事業の概要

① 駅周辺まちづくりの役割

1. 2をふまえ、駅周辺まちづくりの役割については以下のように総括することができる。

○ 嬉野のイメージを向上させアピールできる新たなシンボルとしての役割

嬉野の課題として、歓楽街的なイメージがいまだに残り、観光客の憧れを醸成するような景観になっていない。そのため、駅周辺地区は新たなまちの玄関口として、嬉野の顔となるようなシンボルとしての役割が期待される。特に、癒しのイメージと緑豊かなまちという嬉野の魅力を十分にアピールできるようなまちづくりが必要である。またそのことが契機となって、嬉野全体に景観向上の機運が波及していくことが望まれる。

○ 嬉野の新たな玄関口としての、経済・交通・情報インフラの充実

嬉野の新たな玄関口として、新たな客層を掘り起すことが重要となる。そのためには、国内・海外の訪問客が快適に利用できる交通拠点機能や、デジタルに対応した観光インフォメーション機能を充実させていくことが必要である。

○ 市民と観光客、それぞれのニーズに合わせた駅周辺機能の充実

市民が行きたいと思える機能、そして観光客が満足できる機能を駅周辺では充実させねばならない。様々な人々が、垣根を超えてユニバーサルに楽しめる場所となるために、例えば飲食、物販、体験等の様々な施策を行う必要がある。

これらを網羅することによって、以下の効果が期待できる。

嬉野全体への来訪者の増加

観光をはじめ様々な収入の増加

市民の意識のアップデート

②導入機能の検討

前述の役割を果たすために、以下の機能の導入を検討する。

○交通を利用する個人客がスムーズに目的地に行ける交通拠点機能

交通を利用する個人客がスムーズに目的地に行けるよう、各種モビリティを整備し乗り換えの場を充実させる。



自動運転交通網（バス）



自動運転交通網（タクシー）



巡回バス

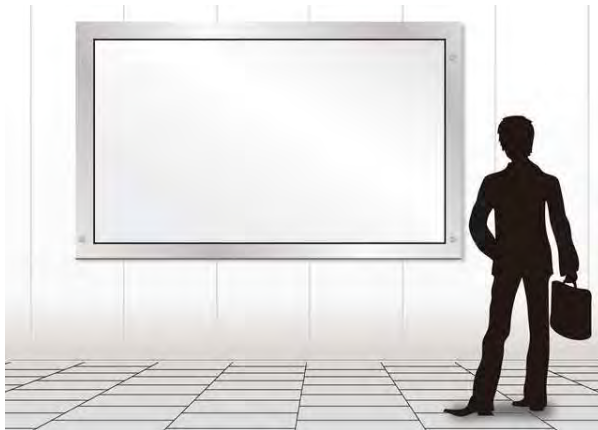


レンタサイクル

○嬉野市や近隣の情報を得ることができるインフォメーション機能

嬉野市および近隣の観光地情報を得ることができる機能、特にデジタル施策や環境を充実させる。

デジタルサイネージや多言語化対応の設備も必要となる。



デジタルサイネージ



スマホアプリ



観光案内所



オムニチャンネルでの情報投下・接触

○嬉野の魅力を伝え観光拠点ともなる飲食・物販・体験機能

嬉野における新たな観光拠点の形成を目指して、飲食・物販機能や、健康をテーマとした体験機能を充実させる。

新幹線乗降客だけでなく、車による来訪客や、医療センター来訪者等も見込む。

癒し、自然、温泉、健康といった嬉野のイメージをアピールし、嬉野のブランドを高めることができるような施設構成を目指し、医療との連携をテーマにした施設の導入も検討する。

嬉野市および近隣の農産品・工芸品等を積極的に扱うことで、地域全体の産業発展に寄与する。



嬉野茶カフェ



入浴施設



カフェ



マルシェ



ショップ

○交流を通じて嬉野をアピールする情報発信機能

各種イベントの開催を通じて、市民と来訪者との交流を深め、嬉野をアピールできる情報発信の場とする。



屋内イベント



屋外イベント



レセプション



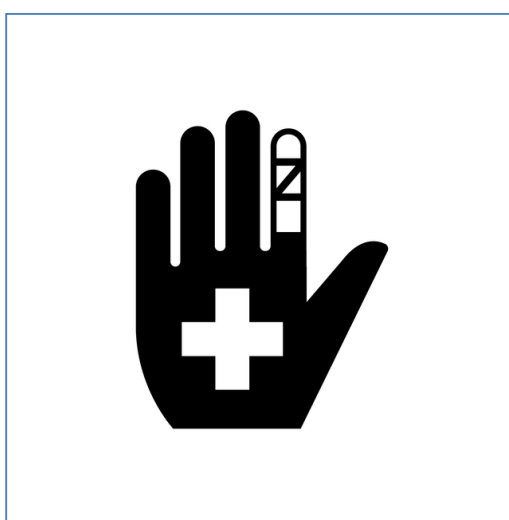
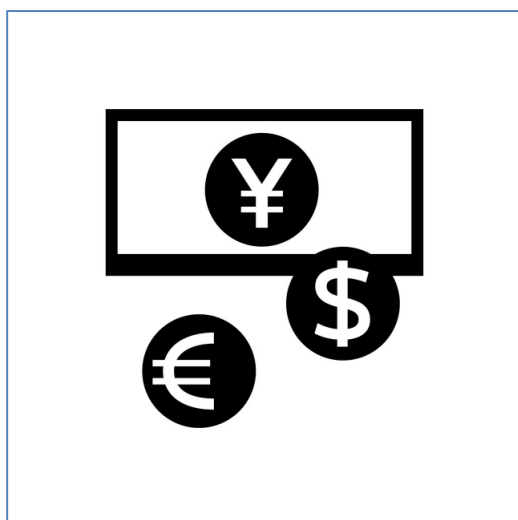
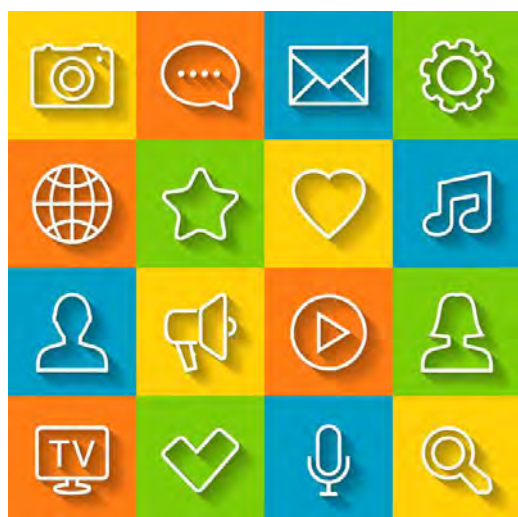
研修・発表会

○充実したバリアフリー機能

これまで述べた機能の充実を図るには、バリアフリー機能の充実は欠かせない。たとえばスムーズな乗降を可能とする機能、誰もが使いやすいトイレ・駐車場、外国人でもわかりやすいピクトグラムなど、きめ細かな対応を行っていく。



各種バリアフリー



ピクトグラム

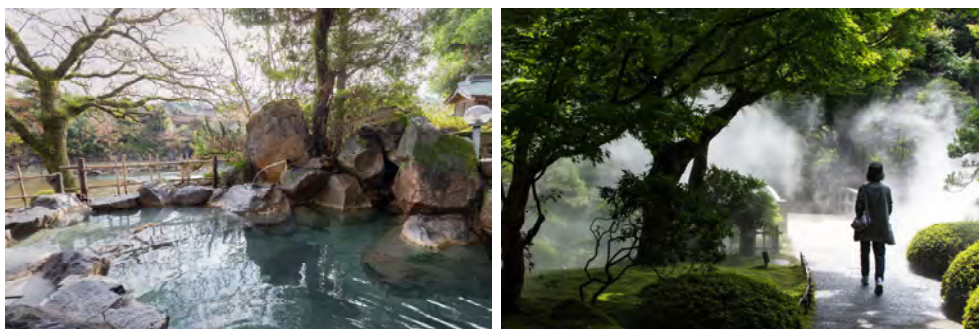
4. 市長へのヒアリング

今回のガイドラインを策定するにあたり、まちづくりに紐付いた駅前の機能や景観について、市長にヒアリングを行った。

嬉野が紡いできた「癒し」の歴史を感じる玄関口

○温泉を活用した施設整備

駅舎に隣接する形で温浴設備を整備すれば、「新幹線下車徒歩0分」の最短で入浴できるスポットとして情報発信が可能。一方で近年の猛暑高温傾向を鑑み、「夏枯れ」対策も必要。冷やし足湯や源泉の美肌ミストなど、オールシーズンで嬉野温泉の良さを体験できる仕掛けも考えたい。



○嬉野医療センターとの連携

2019年6月に駅前に開業予定の嬉野医療センターも、旧海軍病院の時代から市民に親しまれてきた存在。26の診療科を有し、県西南部の高度医療拠点としての機能はもとより、屋上にはヘリポートもあり、救急や災害時対応の機能も併せ持つ。高度な医療サービスを期待する富裕層の外国人患者の受け入れや九州新幹線新鳥栖駅前にある重粒子がん治療施設「サガハイマツ」との往来など、「医療ツーリズム」も念頭に置いた、最先端医療のホットラインを形成する拠点としての機能充実が急がれる。



嬉野医療センターの完成予想図とJR新鳥栖駅前の重粒子がん治療施設「サガハイマツ」

また、駅前の芝生広場などの広いスペースを生かして病院単体で完結するのではなく、来訪者や市民にも広く医療センターが有する有形・無形の資源を開放することを検討したい。活動を展開するにあたっては、併設される看護学校の学生や保育園児たちも巻き込むなど、ソフト面での連携を図っていきたい。



○茶が薫るまちのたたずまい

600年の栽培の歴史を誇り、明治開国期の日本近代化の原動力となった「うれしの茶」の魅力を発信する拠点は必須。蒸し製・釜炒り玉緑茶をはじめ、うれしの紅茶や各種フレーバーティーに加え、別名「シュガーロード」と呼ばれる長崎街道沿いに数多く立ち並ぶ菓子店の銘菓を味わうことのできる日本茶カフェが第一に検討されるものと思うが、商店街ですでに同様の形態で取り組まれている店舗との差別化や住み分けも重要。訪れてすぐの人やこれから新幹線に乗る人に向けた持ち帰り（テイクアウト）に力点を置き、腰を落ち着けて味わうには商店街で店を構えるカフェやお茶屋さん、お菓子屋さんへと誘導することも考えられる。

駅前に鮮烈な香りを局所的にも発生させることで、茶の香りに包まれる空間を演出したい。ほうじ茶のような焦げた香りではなく、少し青さも残るような香りが望ましい。



肥前吉田焼の茶香炉

また、市の郊外に点在するうれしの茶関連の施設や観光スポットとの連動も重要。茶畑の中を歩くことで好評の「九州オルレ」嬉野コースや不動山の大茶樹、坊主原・陣野の茶園など、絶景への導線も確保したい。絶景スポットの回遊性を高めることで「モノ」消費から「コト」消費への転換を図るきっかけとしたい。



○嬉野の魅力を取り込む仕掛け

嬉野町・塩田町はこれまでの歴史において塩田川を中心として繁栄してきた。駅前の親水広場には、嬉野市を貫く塩田川をイメージした水の流れを作り、嬉野の魅力を凝縮した箱庭空間にしたい。新しい嬉野市の玄関口として、融和を演出する場でありたい。



白壁土蔵の国伝統的建造物群保存地区の塩田津と嬉野の川沿いの旅館

旅の高揚感を高める仕掛けを満載

○「手ぶら旅」の提案

現在、嬉野温泉を訪れる観光客の交通手段は自動車を中心だが、新幹線開業後の宿泊旅行客はキャリーバックを引いて徒歩で訪れる人が増えることが予想される。駅を降りてすぐに観光や買い物が楽しめるように、手荷物を預かって一括して旅館に配送する受付窓口を視認性が高い場所に設置したい。民間の宅配事業者などと連携する必要があり、インバウンド（訪日外国人）対策の観点からも電子決済システムで支払いや荷物の識別を行うシステムが望ましい。

○嬉野から始まる「モビリティ改革」

新幹線開業後の課題の1つに駅と温泉街との間に約1.2kmの距離があることがあげられる。轟の滝やうれしの茶交流館「チャオシル」まではさらに2kmを要する。重い荷物を抱えた観光客にとって決して短い距離とは言えないだろう。集客力アップには移動時間を長いと感じさせない仕掛け、もっと言えば距離があることを逆手にとって温泉街に近付くにつれて高揚感が湧いてくるような景観形成、旅情を誘う仕掛けを埋め込んだりと、モビリティ（移動しやすさ）に革命を起こす必要がある。

① 自転車

駅で荷物を預けたらそこから嬉野観光はスタート。自転車に乗り、風を切って観光スポットを巡る「レンタサイクル」の拠点整備と利用システムの構築が必要。ビューポイントに加え、休憩・給水スポットなども重要で、茶店とも協力して塩田や吉田方面も周遊ルートに入れたサイクリングコースを初心者から上級者までのレベルに応じて複数つくりたい。イギリス発祥の地元住民が住みなれた地域の価値を再発見しながらウォーキングコースを選定し、観光客をもてなす「フットパス」と同じ考え方に立ち、自転車愛好家や地元の市民と一緒にコースの選定に取り組むことで一体感を生み出したい。



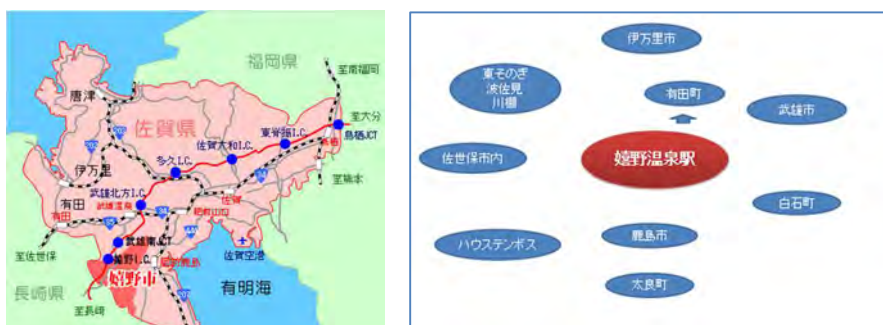
②次世代モビリティ

自動運転車両による旅客運送の研究を進めたい。観光客は駅から目的地までの利便性向上、市民はコンパクトシティー構想や交通弱者対策の中で、高齢者や障がい者、通学などで利用する子どもたちの移動手段の確保に位置付けることも可能となる。車両の実用化にはしばらく時間を要する見通しだが、駅前の駐車場や乗り捨てポイントなどのステーション整備の用地確保は戦略的に行う必要がある。また小型モビリティなどの導入も視野に入れたい。

広域連携・西九州観光の結節点として

○地の利を生かして

嬉野温泉(仮)駅は西九州の要衝に位置し、県内は鹿島市・太良町の有明海沿岸地域、伊万里市・有田町、また佐世保市街地・ハウステンボスへいずれも車で40分圏内に収まる。ハウステンボスでは国家戦略として進められるIRリゾートの誘致に前向きであり、都市型観光と組み合わせる形で「和、温泉、自然」をキーコンセプトに据える嬉野の観光素材を引き立てることが可能。周辺地域の観光資源を組み合わせ、周遊ルートを提案し、嬉野温泉への宿泊増を図るマーケティングや営業、観光資源の調査を担うことを期待したい。



○インバウンドの関西方面への送客拠点として

東アジアからを中心に外国人観光客を満載したクルーズ船の入港が近年急増している。船中泊も多いが、陸上での宿泊地としては、港から一定の距離がある場所が旅行商品の構成上好まれるとされる。嬉野温泉は立地や各港からのアクセスの面で比較的優位にあると評価でき、クルーズ船の観光客に嬉野で一泊していただいて新幹線を使って大阪・京都など外国人観光客に人気のエリアに送客する旅行商品も考えられる。クルーズ船観光客の詳細なニーズや客層を把握した上で必要な施設整備を検討する必要がある。



長崎港に入港するクルーズ船。北部九州に入港が集中しており近年は船体の大型化も進んでいる。

災害復旧ならびに防災・減災の拠点として

○災害に強いまちづくりに向けた取り組み

平成 28 年 4 月の熊本地震や平成 29 年 7 月の北部九州豪雨をはじめ、近年は大規模災害が多発している。嬉野市においても災害に見舞われる可能性は十分にあり、避難や復興支援の拠点としての駅前広場の活用を視野に入れる必要もある。駐車場スペースを炊き出しや給水車の車両の駐車や情報提供機能など既存施設の活用のほか、非常用電源施設や仮設トイレ増設といった災害時の活用を想定した機能も重視されている。また、隣接する嬉野医療センターと連動した医療供給体制や屋上ヘリポートの活用を視野に入れるなど、防災・災害計画でも位置づけを明確にしたい。

○全体的な所感として

嬉野市全体として茶や森林など、緑豊かな土地ではあるが、色味が少ない。バラの花など緑を際立たせる植栽も考えたい。遠く臨む山々や茶畑を借景にしつつ、田舎らしさや陶磁器製造で栄えた歴史的たたずまい、かつての歓楽温泉地として栄えたネオンの明かりでさえ忌まわしいものとして隠すのではなく、取り込んで彩りとする度量も求められていると思う。



吉田・納戸料の「百年桜」。桜色があるからこそ茶畑の緑も際立つ。

第4章 整備のルール

1. 景観・機能に関するルール
 - ①癒しを感じさせるためのルール
 - ②伝統文化を活かすためのルール
 - ③自然で安らぐためのルール
2. 建物に関するルール

1. 景観・機能に関するルール

①癒しを感じさせるためのルール

集う人、訪れる人がくつろぎや憩い、安らぎを感じられるようにしなければならない。

○椅子やベンチなどを随所に設置し休憩や交流ができるスペースを多数配置することに努める。

○柵や塀は設置せず、回遊性を高め空間の広がりを感じさせるよう努める。

○無機質な人工物は出来る限り排除するよう努める。なお、防災機能についても景観について配慮するよう努める。

○照明については、ぬくもりのある暖色系を用いることに努める。



② 伝統文化を活かすためのルール

嬉野が持つ「温泉」「うれしの茶」「肥前吉田焼」などの伝統文化。その魅力を活かした作りにしなければならない。

○足湯を配置するなど、「温泉」を感じさせる工夫を行う。

○磁器や磁石を効果的に配置するなど、「肥前吉田焼」の産地であることが感じられる工夫を行う。

○「温泉」「うれしの茶」「肥前吉田焼」など、嬉野の特産品を購入、体験できるような施設の配置に努める。



③自然で安らぐためのルール

嬉野は「茶畑」や「山」、「川」や「滝」など、豊かな自然に包まれている。その趣と安らぎを活かした作りにしなければならない。

○茶の木などを含め、積極的に植樹を行い、まるで森のなかにいるような雰囲気を作る。

○駅前には遠方の山が借景として見え、過美で商業的な看板などが目に入らない、抜けの良い空間とする。

○川の流れの活用や、自然を感じられる水路の設置など水を感じられる工夫を行う。

○自然のぬくもりや暖かみを五感で感じるような工夫を行う。



2. 建物に関するルール

建設する建物は以下のルールに従わなければならない。

○建物は、長崎街道の宿場町であった嬉野の歴史と情緒、趣を感じられる外観で統一する。

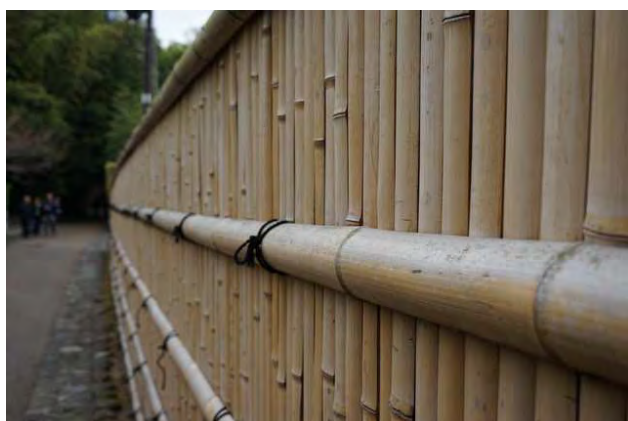


○建物は地上からの高さを概ね 10m以下とし、低層建築物を基本とする。



○建物屋根については駅ホームからの景観を考慮し、色彩・形状を統一する。

○建物付属物については目隠しなどを行い周辺に溶け込むよう配慮する。



○各店舗前面はガラス張りや開放にするなど、外部から中の様子が見え気軽に入れるようにする。



○店舗の外装は彩度を抑え、過度な装飾を避ける。看板は大きさ、文字サイズ、色味を抑えたものとし、駅前全体で嬉野らしい統一感を生み出す。

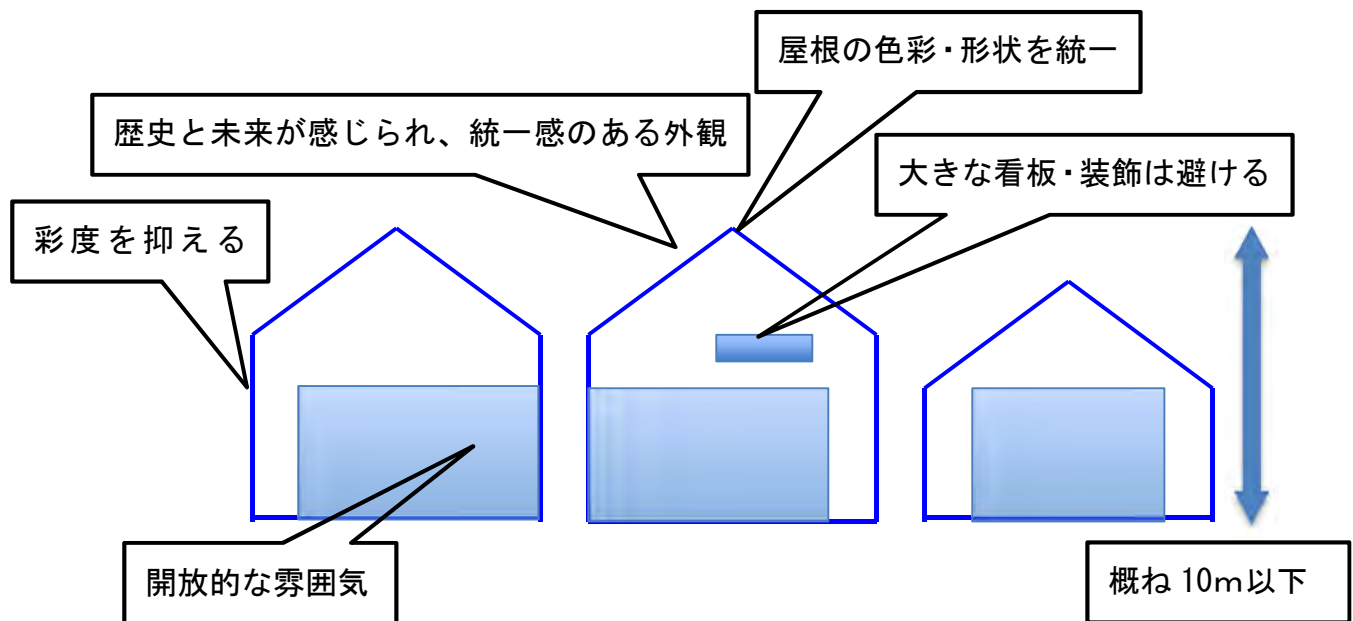
○夜間・店休日などの閉店時における店舗外観についても全体の景観に影響がないよう配慮する。



○生活利便施設については、店舗の一部に観光客向けのサービスを用意するよう務める。

○駅前広場の庇、サインなどは色味や形状などを工夫し、全体の景観に十分配慮して設置する。

○外国人を含めた、様々な人々に受け入れられやすいユニバーサルデザインにも配慮する。



参考画像：塩田津の町並み

※ 用語解説

- ・ EC 電子商取引。インターネットを利用した小売り。
- ・ オムニチャンネル 様々な媒体を介し、リアル（実店舗）とネット（インターネット通販）を連携させ購入（販売）以外の顧客の行動についても、包括的・双方向で捉える。
- ・ 再現性 事象が再現すること。対立概念は、事象が再現しないことであり「一回性」。
- ・ コンテンツ 内容。情報の中身。媒体から発信される情報。
- ・ ジビエ 狩猟で得た天然の野生鳥獣の食肉。
- ・ スーベニアショップ 観光地などの土産物店。
- ・ デジタルサイネージ 表示と通信にデジタル技術を活用し、平面ディスプレイやプロジェクターなどによって映像や文字を表示する情報・広告媒体。
- ・ ピクトグラム 情報や注意を示すために表示される視覚記号（サイン）。
- ・ ファサード 建築物の正面部分（デザイン）。
- ・ フットパス 森林や田園地帯、古い街並みなど地域に昔からあるありのままの風景を楽しみながら歩くことができる小径（こみち）。
- ・ モビリティ 乗り物。移動手段。